京都の都市民俗と伝承世界

――民俗行事における小野篁伝承の役割とその展開について

松 山 由布子　　比較人文学　日本思想史専門　博士前期 1 年

研究目的

本研究は京都の境界地域に付された都市の精神性について，小野篁の冥界往来伝承を中心に考察を加えるものである。8 世紀に成立した古代都市である京都は，その歴史的性格から人為的な都市構造の中に都市民の様々な精神的風土を見て取ることができる。洛中に墓を作らせず，死や穢れを京の「外」に追い出してきた京都の町は，その境目となる境界に両者の混沌とした世界を持っている。そこには死や境界と関わる様々な説話や伝承が伝えられ，その土地の持つ特殊な性格を体現しているのである。

小野篁の冥界往来伝承は中世期に成立し，京都を中心に時代に応じて様々に変化しながら現在まで伝えられている。この伝承は「この世」と「あの世」を往来するという話の展開から，京都の周縁地域において「境界」や，「死」と関わる民俗の中で語られており，このことから京都の複雑な境界構造やその都市性とも関わりを持つことが推察される。こうした京都における伝承と伝承地，都市民俗の関係について，通時的時間軸でその変遷を捉えることが本研究の最終目的であるが，今回の調査報告ではその中の現在の京都における小野篁の伝承の展開について報告する。

調査報告

この世とあの世の境を越える越境の異能者としての小野篁の伝承は例外なく都市の境界地に伝えられている。現在の京都における小野篁に関わる伝承は，大きく分けて

① 葬送地と関わる伝承

② 六地蔵めぐりに関わる伝承

の 2 つがあり，8 月に行われる盂蘭盆会や地蔵盆などの行事と結びついている。これらの事例について以下に報告する。

1－1　六道珍皇寺と六道まいり

六道珍皇寺は鴨川の東岸，中世共同墓地として知られる鳥辺野葬送地の北端にあたる六波羅地域にある。珍皇寺は11世紀にはその存在が認められており，小野篁は12世紀に成立した『伊呂波字類抄』，『今昔物語集』において珍皇寺を開いたとされている開基伝承者の一人である[1)]。寺伝では小野篁は境内の井戸より地獄へ往還したとされており，これを由緒として，珍皇寺では毎年 8 月 7 日～10日にかけて「六道まいり」と呼ばれる精霊迎えの行事が行われている。

精霊迎えは盂蘭盆会に際して先祖の霊をこの世に迎える行事であり，珍皇寺には早朝から夜中にかけて京中から毎年約10万人の人々が宗派を問わず訪れる。行事の内容は，まず門前で高野槙を買い求め，本堂で卒塔婆に先祖の名を記してもらい，向かえ鐘を撞く。そして境内の地蔵菩薩像の前で卒塔婆を水回向して先祖の霊を槙の葉に宿し，各家に持ち帰るというものである。境内の篁堂と呼ばれる堂宇には室町時代の作である閻魔大王像と江戸時代初期の作である小野篁像（約180cm）が安置されており，また境内ではかつて熊野比丘尼が絵解きに使用したとされる「熊野勧進十界図」という絵図も展示される。この六道まいりについては16世紀の地誌類にはすでに現在と同様に行われていたことが記されており，また桃山時代に製作された「珍皇寺参詣曼荼羅」にも地獄と関わる置物が境内に多数置かれる様子や迎え鐘を撞く人物，篁の井戸などが描かれていることから，現在の伝承や民俗がこれらの時代にまで遡るものであることが明らかとなっている。ただし珍皇寺では平安時代中期頃にはすでに施餓鬼供養が行われていたことが知られている[2)]。

六波羅の南に展開していたとされる鳥辺野葬送地は，9 世紀には葬送の記録が見られる。その後中世共同墓地として展開し，近世も火屋（火葬場）が置かれるなど，京都の代表的な葬送地として知られる場所である。珍皇寺の門前，また珍皇寺から100m ほど西にある西福寺の門前は「六道の辻」と呼ばれている。六波羅は洛中よりの葬列が鳥辺野へ向かう入り口にあた

綱を手前に引き，地獄まで響くと言われる迎え鐘を撞く参詣者

高野槙で卒塔婆に水をかけ，水回向をする参詣者

六道珍皇寺の小野篁像

る野辺送りの場であり，珍皇寺を“地獄の入り口”とする伝承は，この地の葬送地の入り口としての性格と関わるものであると考えられている。洛中から見て川を隔てた周縁地域であった六波羅は，現在に到るまで京都における「葬送」や「死」と関わる場所として都市の中に機能している。珍皇寺の小野篁の伝承はこうした六波羅の土地の性格を体現的に示すものであろう[3]。

１－２　千本ゑんま堂とお精霊迎え

千本ゑんま堂（引接寺）は京都の北部，平安京の朱雀大路にあたる千本通りの北端である千本地域にある。14世紀頃に成立したとされる千本ゑんま堂は，現在の寺伝では小野篁を開基，定覚上人を中興の祖とし，本堂には本尊として鎌倉時代の作である丈六の閻魔王像を安置している[4]。この寺でも六道まいりと同様に精霊迎えの行事である「お精霊迎え」が８月７日～15日にかけて行われており，寺伝ではその作法は“小野篁によって伝えられた”ものとされている[5]。また本堂脇の別の堂には地蔵菩薩像，定覚上人像と共に，約100cm の小野篁像が安置されている。

千本ゑんま堂の小野篁の伝承は，古くは17世紀に刊行された地誌類に寺の創建者や閻魔王像の建立者を篁とする記述が見られる。しかしこの伝承は18世紀の地誌には見られなくなり，閻魔王像を本尊とする性格に付された一時的なものと考えられる。現在の伝承は井阪康二氏の研究にもあるように近代以降に当寺が衰退し復興する過程で成立したものと考えられ[6]，現在境内に安置されている篁像も管見の限りこの時代の作と思われる[7]。

しかし，ゑんま堂の所在地は，12世紀の後期より共同墓地として成立した蓮台野の入り口に当たる。蓮台野は船岡山の西から紙屋川に至る一帯を言うが，この辺りは平安京の右京の衰退による都市機能の東遷によって，平安時代中期頃に都の周縁となった場所である。ゑんま堂は蓮台野の入り口で珍皇寺と同様に野辺送りの場であり，すぐ北の上品蓮台寺と共に京中の葬送に関わる場所であったと考えられている。

千本ゑんま堂の篁伝承は近世以降の新しいものでありながら，珍皇寺と同様にかつての葬送地の入り口において語られ，現在共に精霊迎えの場として京都の都市民俗に組み込まれている。またゑんま堂では３年前

千本ゑんま堂の精霊迎えの様子

千本ゑんま堂の小野篁像（写真左）

より12月23日に篁忌として餅つきを行っているが，その由来としては近江の小野地域にある小野篁神社の祭神が日本で最初に餅をついたとされる米餅搗大使主命（たかねつきおおおみのみこと）であることを取り上げている。これは篁伝承の新しい伝播であり，篁伝承の歴史的な展開やその伝播について考える上でも注目すべき事例であろう。

１－３　福生寺と生の六道

また小野篁の伝承は京都の西にある嵯峨の地にも伝えられている。嵯峨の清涼寺境内にある薬師寺は，江戸時代に篁が地獄より帰る出口とされた福生寺が明治に廃寺となって後に統合された寺院である。福生寺は珍皇寺が地獄への入り口として「死の六道」と称されたことに対して，「生の六道」と呼ばれたことが18世紀末の『拾遺都名所図絵』等に見られるが，薬師寺には福生寺旧蔵で伝篁作の生六道地蔵菩薩像やこの地蔵の来歴を記した『生六道地蔵菩薩縁起』，約50㎝の小野篁像を安置している。戦後福生寺のものと思われる七つの井戸が清涼寺の東，化野に至る旧街道に沿って発見されている[8]。

珍皇寺に対応したこの福生寺の伝承は近世以降に珍皇寺の伝承を元に作られたものと考えられているが[9]，福生寺一帯は，14世紀成立の『徒然草』にも鳥辺野と並んで記されている中世共同墓地である化野の東端にあたり，先の珍皇寺やゑんま堂と同様にかつての葬送地の入り口にあたる。現在薬師寺では８月24日の地蔵盆に檀家による精霊送りの行事が行われるが，これは薬師寺住職の安藤靖高氏によれば檀家と共に福生寺より引き継がれた行事とされており，先の両地と共に地域の葬送や先祖供養の行事に関わるものとして考察する必要がある。また，『生六道地蔵菩薩縁起』はその話が後述する六地蔵めぐりと同様に，篁が地獄で生身の地蔵に出会うという共通のモチーフを持つことや，本調査において先の井戸が発見された場所の前を通る旧街道から化野に至る辻の一角で珍皇寺門前付近と同様に「六道の辻」と呼ばれていたという聞き取りがあったことも[10]，この地の篁伝承の成立や伝播を考える上で注目すべき点であると思われる。

薬師寺の地蔵盆の様子

生六道地蔵菩薩像（写真正面）と小野篁像（写真左）

２　六地蔵めぐりの小野篁伝承

六地蔵めぐりは８月22日，23日に行われ，伏見（大善寺）・山科（徳林庵）・鞍馬口（上善寺）・常盤（源光寺）・桂（地蔵寺）・鳥羽（浄善寺）の六ヶ所に祀られている地蔵を巡って紙幡（五色の紙の札）を集め，「厄病退散」「福徳招来」を願う行事である。参加者は現在は中高年層が多く見られ，個人の車の他，新聞社や旅行会社によるツアー[11]や，市バス，観光タクシーなどによって巡られている。

六ヶ所の地蔵堂の中で中心的役割を担い，行事の創始とも深い関わりを持つのが「伏見六地蔵」の大善寺である。この寺院には文末に寛文五年（1665）の成立と記される『山城州六地蔵菩薩縁起』が伝わっている。その内容を要約すると，“六地蔵めぐりの地蔵菩

大善寺の地蔵菩薩像（写真中央）と小野篁像（写真左）

薩像は，篁が満慶上人と共に地獄に赴き，そこで出会った生身の地蔵の姿をこの世に帰って後に六体の像に写したものである。元は大善寺に六体ともあったが後白河院の御世に京中六ヶ所の街道の入り口に移された。”というものである。また近世の多くの地誌類では，“篁の作った六体の地蔵は平清盛の命で西光法師によって各地に六角堂を作って配置された。”とされており，現在の行事の由来の中でもそのように伝えられている。また大善寺の地蔵菩薩像の脇には約100cmの小野篁像が安置されている。

『山城州六地蔵菩薩縁起』は中世に最も流布した地蔵説話の一つである『矢田地蔵縁起』と内容的に重なる部分が多い。『矢田地蔵縁起』は鎌倉時代にはその成立が確認されているもので，『六地蔵菩薩縁起』は近世に『矢田地蔵縁起』を元に製作されたと考えられる。しかしここで像を作ったのが『矢田地蔵縁起』における“満慶上人”ではなく“小野篁”とされていることには，有名な地蔵菩薩縁起の引用という以外にも何らかの要因があるように思われる。またこの六地蔵めぐりについては，中世後期成立の『源平盛衰記』には六地蔵めぐりと同様の行事を指すと思われる「廻り地蔵」を“西光法師”が作ったという記述があり，また黒川道祐が17世紀に記した地誌である『雍州府志』，『石山行程』には西光の主人である“信西入道”が六地蔵を作ったとする説が載る。この西光法師は現在の六地蔵の伝承では地蔵を京内各地に配した人物とされており，またその名の載らない『六地蔵菩薩縁起』でも地蔵の移転は後白河院世紀とされている。このことから後白河院世紀にこの行事に関わる何らかの動向があったか，また伝承として時代を設定される何らかの理由があることが推察される。西光法師は承安三年（1173）三月十日に浄妙寺領内（大善寺も含む）で堂供養を行った記録[12]があり，信西も『平治物語』では小野篁と同じ冥官であるとされていることから，現在の小野篁伝承に到る伝承の推移という点において今後考察が必要である。

今後の研究の展開と課題

先の①に挙げた小野篁伝承の伝承地は，どれも葬送地の入り口という特徴を持っている。その中でその成立や歴史において最も古いものが六道珍皇寺であり，千本ゑんま堂や福生寺の篁伝承は近世や近代に珍皇寺の伝承を受けて作り出された伝承であると考えられる。しかし個々の伝承はただ珍皇寺の伝承の伝播というだけでは済まない独自性も持っている。林屋辰三郎氏は京都では東と北の文化圏が相互に対応関係を持つものであり，両所に農耕神である八坂神社と北野天満宮があるように，死を司る六道珍皇寺と千本ゑんま堂があり，人々の生活と関わっているとしている[13]。福生寺があった嵯峨も都から離れた場所で独自の文化圏を持っており，そうした地域ごとの生と死のシステムがそれぞれの生活圏の中の境界地に意識されたということもこうした伝承が各所に見られる理由として考えられる。

また上記のような小単位の生活圏を持ちつつも，京都は都市としての千年以上の歴史を持つ。京中の六ヶ所の境界地をめぐる②の六地蔵めぐりはそうした京都という一つの都市空間においての境界伝承と考えられることができるだろう。また小野篁の属する小野氏の根拠地が近江の小野の地にあり，そこには先に挙げた小野篁神社や小野道風神社等，小野氏と関わる旧跡が数多く存在する。柳田国男氏はこの地の小野氏が，宮廷祭祀を司る猿女氏との関わりから祭祀や芸能と関係の深い氏族的性格を持っていたことを指摘しており[14]，このことは篁伝承の起源とも関わるものとして考慮する必要があるだろう。こうした時代を通して様々に展開する京都の小野篁の伝承の変遷や都市民俗における伝承の役割などについて今後考察していきたいと思う。

注

1）珍皇寺の開基伝承者にはその他に山代淡海，慶俊僧都，弘法大師等が挙げられている。

2）1022年～1108年に成立の『東山往来』（『続群書類従』巻三五九〕に施餓鬼供養についての問答が見られる。

3）西福寺では六道まいりの期間中当寺に所蔵されている「熊野勧進十界図」や「壇林皇后九相図」，「那智参詣曼荼羅」といった地獄や死，社寺巡礼などと関わる絵図が多数展示される。またその南にあり，空也上人に由来する六波羅蜜寺でも精霊迎えの万灯会が行われる。西福寺の門前には，昔話の

「子育て幽霊」の話型のいわれを持つ「幽霊子育飴」も売られる。また子育て幽霊譚については近世の仮名草紙である『奇異雑談集』に蓮台野を舞台とした話が載る。

4）定覚上人は当寺の銅鐘銘文ではゑんま堂の開基とされている。現在の伝承では篁が最初に作った堂と閻魔王像が応仁の乱で消滅し，後に定覚が再興したとしている。（ただし応仁の乱は定覚の時代よりも後の出来事。）

5）また16日には大文字の送り火前に精霊送りとして各家の盂蘭盆の供物が収められる。

6）井阪康二「嵯峨野の生の六道と千本閻魔堂のショウライ迎え」『民俗の歴史的世界』17号（1994年）

7）1895刊の『京華要誌』（京都市編）に小野篁像の記録が見られる。

8）発見された井戸は現在消滅している。福生寺の小野篁伝承や井戸については，前薬師寺住職安藤藤良全氏の「生の六道と小野篁公」（雑誌『知恩』1978年8月号　所収）に詳しい。また『拾遺都名所図絵』には福生寺は「清涼寺の戌亥」にあるとされ，所在地については考察が必要であると思われる。

9）井坂氏前掲論文による。

10）薬師寺住職，安藤靖高氏の談。

11）本調査では主に地元の高齢者が多く参加する京都新聞主催のバスツアーへ参加し調査を行った。このツアーへの参加者は両日で540人以上（一日あたりマイクロバス6台）であった。

12）平安末期の九条兼実の日記である『玉葉』と，13世紀成立の歴史書である『百錬抄』の承安三年（1173）三月十日条に見える。

13）『町衆――京都における「市民」形成史』林屋辰三郎著　中央公論社（1964年）

14）柳田国男「妹の力」『定本柳田国男集』巻11　柳田国男著　筑摩書房（1982年）